

五郎時致

天保十二年（一八四一年）七月 中村座 上演

作詞

三升屋二三治

作曲 十代目

杵屋六左衛門

さて、曾我兄弟の弟、五郎時致は、父の仇は必ず討ち取るものだという思いを、くじけることなく持っていたのだが、評判の高い化粧坂にある遊廓の「化粧坂の少将」と呼ばれる女性に惚れ込み、猛り勇む心意気は、春の雨に濡れた如く緩んでしまったのです。雨の降る夜も雪の日も通い詰めた、大磯の遊女との物語です。

廓での様々な遊び方というのは、つい吞めり込みやすく、男は、あの子にちよつと一筆、恋文を伝えようと思ひ、女は、好いた男の心が疑わしい、人情をわきまえないと、嫉妬の返事をよこすものです。

そうした遊廓のやり口に、つい乗せられて、陽気で色っぽい酒に酔い、月の出る日暮は、晴れが良いのか、晴れないのが良いのかと、たわいもない。とかく霞のが、春というものですよね。

オオ、そういうことではなかった、そのこととは、  
我もまた（兄と一緒に）父の仇を何時か晴らそうとしていたのだ。  
天を吹く風は、十八年で反対に吹き返すと云うではないか。  
耐えてきたこの十八年で、仇討ちの絶好の機会が巡ってきたのだ。

一念を込めて、宿敵を逃してなるものかと、勇猛なる気力が満ち、その有様は牡丹の花に、ひらひらと飛びかかる蝶の如く、勇ましくもあり、一所懸命でもあるのです。

藪では鶯が気ままに鳴いて、庭の梅が羨ましがるのは、ほんとは、そよそよと春風が、恋の噂を立てて吹き送っているからでしょう。

思えば、曾我五郎と少将も、廓の堤に咲く堇と鶯草も、同じ露に濡れた同士、短い情愛の日々を過ごしたのです。

愛欲か恋かの誠くらべは、ほんと、江戸吉原の仲の町でも、どうにも仕方がないもの。

親孝行と勇敢さで並ぶもののない手柄を挙げたのは、人の姿をした神だと、後の世の人々が畏れ崇めている今年、またもや、花のお江戸の浅草観音寺で曾我兄弟を祀る箱根現人神の出開帳が、丁度あるって言うじゃないか。  
こちらの「五郎時致」の上演と同様、賑わうのでしょね。

令和五年正月三日

大中臣正比呂 拙訳

